

開發途上国を考ふる「東南アジアの国民感情」  
 一石井米雄教授講演要旨一

資料	分類
名称	開發途上国を考ふる「東南アジアの国民感情」 一石井米雄教授講演要旨一

LION FILING FOLDER No. 31 A4

JICA  
 100  
 36  
 PLP  
 BRARY

企調'75-14

開発途上国を考える“東南アジアの国民感情”

—石井米雄教授講演要旨—

JICA LIBRARY



1058280[7]

1977年2月

国際協力事業団

企画調査調整部企画課

国際協力事業団		
受入 月日.	87.4.22	100
登録 No.	08511	36
		PLP

## ま え が き

本資料は、当部が技術協力動向調査の一環として 8月  
10日京都大学教授石井米雄氏をむかえ開催した講演会の  
講演内容の要旨をとりまとめたものであります。

石井教授の講演は同教授の研究と豊かな現地経験を背景  
に極めて含蓄あるものであります。

本資料が国際協力に携わる方々の参考となれば幸いです。

企画調査調整部長

田 中 常 雄

## 東南アジアの国民感情

### (一) 東南アジア諸国の国民感情を考える上での問題

近年、反日論に関する出版が盛んであるが、その一例に「反日感情の構造」(自由社刊、日本文化フォーラム編)がある。

本書は、日本人学者の著による議論によって構成されており、この中で5点のコンセンサスが指摘されている。

- ① 相手国社会の発展段階の多様性を理解すべきである。相手国が、発展のいかなる段階にあり、我々ほどの側面にかかわっているかを常に把握し、そのかわりの波及効果・影響を常に考えるべきである。
- ② 善か悪かの二者択一的アプローチは避けるべきである。
- ③ 「日本文化をも、ひとつの文化」とあるとの立場に立って相手国社会を *other culture* として客観的に把握し、「文化相対主義 *Culture relativism*」に徹すべきである。
- ④ 他国による被支配、とくに西欧への従属の歴史と理

解すべきである。

- ⑤ 高速度な歴史の流れに伴ない、発展途上諸<sup>12</sup>において  
も、急速な発展が要求されており、その急速発展に  
対する不適応現象が見られることへの理解が必要である。

## (二) 東南アジアの現代世界における位置または特性

東南アジアは多様で複合的であり、歴史上、東南アジアを統一した国はなかった。

世界各地には、それぞれの地域に支配的な高文化が存在する。たとえば欧米にはキリスト教文明、中近東にはイスラム文明という代表的な文化、文明があるが、東南アジア全域を覆う単一の高文化は存在しない。

### ① 東南アジアの語族

東南アジアにおいては語族も多様で4種もある(欧州においては一部を除いてインド・ヨーロッパ語族のみ。)

- ① オーストロネシア語族(インドネシア語、タガログ語、チャム語等)
- ② モン・クメール語族(カンボジア語、ベトナム語)
- ③ タイ語族(タイ語、ラオ語)

(2)

④ チベット・ビルマ語族(ビルマ語)

#### Ⅳ 東南アジアの文化圏

東南アジア諸国はそれぞれ固有の基礎文化の上に近隣大国の高文化の影響を受け、いくつかの文化圏形成の足跡を残した。

##### ① インド文化圏

インドは東南アジアに対し、商業上の係わりを以って文化的影響を与え、次のような時代をたどってスラのインド文化圏を形成した。

サンスクリット語文明が、西暦紀元前後から紀元後3世紀頃まで続き、これが後に小乗仏教圏と、イスラム文化圏とのスラに分裂した。小乗仏教は、大陸部すなわちタイ、ラオス、カンボジア、ビルマに及び、イスラム文化は島嶼部すなわちマレーシア、インドネシアに及び、それぞれの文化圏を形成した。

##### ② 中国文化圏

中国文化は、漢の武帝以来軍事支配を以ってベトナムに及び、中国文化圏を形成した。

##### ③ カトリック文化圏

フィリピンは、インド及び中国の影響を受けずに、

16世紀初頭 直接ヨーロッパ文明を担うスペイン  
の支配を受け、カトリック文化圏を形成した。

#### ④ 東南アジアの政治圏ー近代以降のヨーロッパ勢力 の影響

東南アジアは、近代以降、文化圏とは別の原理で  
政治的に分割された。

##### ① イギリス圏 イギリス

イギリスは、ビルマ、マレーシア、シンガポ  
ールにおいて イギリス政治圏を成立した。

##### ② オランダ圏

オランダは17世紀初頭、インドネシアを支配  
下において オランダ政治圏を成立した。

##### ③ フランス圏

フランスは18世紀末から19世紀にかけて、  
ラオス カンボジア ベトナムを支配下に置き、  
フランス政治圏を成立した。(ただし ベトナム  
は その被支配の歴史から見れば「中国ーフラン  
ス圏」と呼ぶべきであろう。)

##### ④ スペインーアメリカ圏

フィリピンは16世紀初頭にスペインの支配を、



19世紀末以降はアメリカの支配を受けた。

19世紀に東南アジアを襲った植民地主義に対し タイだけは独立を保持した。

東南アジアへのヨーロッパ影響は島しょ部へは16〜17世紀に始まったのに対し 大陸部へは19世紀中頃以降からであった。この200年の差は、伝統的社会に対して与えたインパクトの大小となって表われている。

#### ㊦ 東南アジアの内部的構造

東南アジアの多様性を文化的、政治的に加えられた外部的要因から解明を試みたが、次に内部的視点に立ってその多様性を考える。

##### (i) 伝統的社会構造

###### ① 「首都—地方」の一核型

東南アジア諸国は、首都以外に大都市が発達しなかった。日本においては封建都市がよく発達し、近代化以降、教育の普及や交通ネットワークの発展の大きな助けとなった。東南アジア諸国においては、それが欠けている

ため 中央と地方との関係がスムーズでない。

## ② 国王・官僚と農民

東南アジア諸国の社会は国王及びその家産官僚と農民との二つの階層に分かれ 商工業層が欠落している。

近代以降西欧人による支配が始まると、華僑が印僑のこの中間に加わって複合社会を形成した。

### (ii) 現代の社会構造

東南アジアの社会がいかなる世代によって構成されているかを考える。

第一世代 独立に参与した世代。たとえば、スカルノ、ホー・チ・ミン等

第二世代 アメリカ留学の体験にあるテクノクラートの世代。60年代以降に各国で策定された経済開発計画に参画する役割を担った。彼等は、第一世代にはみられないような合理的精神を持つ、エコノミスト・エリートに代表される世代。

第三世代 戦後急速に拡大された教育から生まれた世代。現代社会のひずみに注目し、共通した焦燥感を持つ。反日論の重要な担い手。毛沢東、チエ・ゲバラなどを愛読する。

この世代がひとつの政治勢力となった場合合理的対応のみでは不十分。相手方のエモーションリズムの根底にあるものの理解が必要である。

(iii) 民衆の意識構造—「国民」という概念が未成熟

東南アジア各国は民族構成が複雑なため、国民という概念を形成することが難しい。

たとえば、マレーシアにおいては、マレー族が50%、漢人が35~6%、インド人が10%と、複合国家であり、それゆえに「マレーシアン」という概念形成がやりにくい。

ビルマではビルマ人の数が多くやや安定的であるが、15%の非仏教徒の存在は、国民統合の潜在

的分解要因である。

東南アジアの社会においては主要民族がマジョリティと占めている場合と、そうでない場合とがあるが、後者の場合マイノリティがひとつの重要な問題である。マイノリティには、都市のマイノリティ、農村のマイノリティ、*tribe* のマイノリティの3種類があり、主要民族とマジョリティ・グループとの関係が国民という概念の形成に障害となっている。

